真宗大谷派ハンセン病問題に関する懇談会
NETWORK NEWS
ネットワークニュース　願いから動きへ

39
2014,9,30

「菊池恵楓園での保養」報告

怒りが足りない

8月18日～23日、第3回「福島の子どもたちと一緒に過ごす夏休み　in 菊池恵楓園」を実施した。今回は、10家族32名をお迎えすることができ、その内、初参加の家族は3家族であった。

2日目の19日、まず納骨堂に献花、園内・資料館見学を終え、午後より入所者、参加したお母さんたち、自分で作った野菜を福島に送り続けているグループ、原発再稼動に反対するグループ・実行委員会スタッフで、意見交換会を行った。

保養に参加した子どもたちと

まず自治会長より歓迎の挨拶ならびに恵楓園の現状をお話しいただいた。続いて参加者一人ひとより自己紹介を兼ね、いま置かれている状況をお話しされ、福島ということで受けた差別の実体験を語られた。その中で、「地元で放射線量のことや飲食物による内部被ばくの問題や子どもを守る一時保養などのことがお互いに語ることが憚られるという空気が横たわってきている」と話された。お母さんたちの話をじっと聞いておられた一人の入所者より「怒りが足りない、もっと怒っていいのではないか」という発言があった。

私にはこの言葉は福島に生きる人たちに対しての励ましであると同時に、長い間、国の強制隔離政策の下に意思表示することさえ奪われてきた入所者の自戒の念を込めた言葉に聞こえた。そしてこの怒りという言葉を長い間忘れてきた私に対しての叱咤激励であり、世の悲しみや苦しみなどの不条理に対して怒ることを忘れてきていたことを思い起こさせるものであった。

『親鸞聖人御消息集』の「この世のあしきことをいとうしるし、この身のあしきことをいとうしるし」（『真宗聖典』561頁）という言葉が浮かんできた。

「世をいとうしるし」ということは、悲しみ・怒りを表現せよ、表現し続けよということだと感じた時であった。

解放運動推進本部　大屋 徳夫

あとがき

私が神美知宏さんと谺雄二さんが亡くなられたことを知ったのは、たまたま見た知人のFacebookの投稿からでした。谺さんが病床に伏されていたことはひとづてに聞いてはいましたが、神さんは昨年10月に東京で開催された「第9回真宗大谷派ハンセン病問題全国交流集会」で元気なお姿を拝見していたため、正直信じられませんでした。

初めて神さんにお会いしたのは、2年前の第8回目の交流集会でした。残念ながら多くの言葉を交わしたわけではありませんでしたが、スマートで理知的な容貌から語られる言葉は、一つ一つに魂が込められているように強く、遠くからでもその迫力が伝わってきたことを覚えています。

神さんは80歳を過ぎてもなお、先頭に立ち闘い続けてこられてきました。「このまま黙って死ぬわけにはいかない。生きていてよかったという状況を実現して、われわれの運動を閉じたい」とも神さんは語られています。もしかしたら神さんはまだファイティングポーズを解いてはいないのかもしれない。本当の意味でハンセン病問題が解決するまで神さんは闘い続けているのではという思いがよぎります。

神さんの優しくも厳しい眼差しが、ハンセン病問題がまだまだ解決していないことを物語っています。残された私たちは、そのことをしっかりと自覚していかなければならないのだと改めて感じています。

（「ハンセン懇」広報部会　高橋 深恵）

真宗大谷派ハンセン病問題に関する懇談会　ネットワークニュース
願いから動きへ
真宗大谷派ハンセン病問題に関する懇談会
ネットワークニュース『願いから動きへ』39号

発行日●2014年9月30日
発行人●木越　渉
発　行●真宗大谷派解放運動推進本部
〒600-8505
京都市下京区烏丸通七条上る
真宗大谷派宗務所
TEL：075・371・9247
FAX：075・371・9224
E-mail：
kaiho@higashihonganji.or.jp

ご門徒さんから西日本新聞にハンセン病問題の記事が出ていると教えられ、手に入れると「ハンセン病 体溶ける」「友達がかかったらはなれます」との見出し（6月6日付）が目に飛び込んできた。

読んでみると福岡県内の小学校でハンセン病についてなされた人権授業後の子どもたちの感想文に書かれていた言葉であった。

人権学習担当の教師はハンセン病への偏見や差別をテーマに、自作の教材を使って授業をした。授業を受けた子どもたちの感想文の半数には、「ハンセン病は怖い」「おそろしい」と書かれている。しかもこの感想文は、担任の教師の手紙と共にそのまま菊池恵楓園自治会に送られた。人権学習担当、学級担任の教師たちは子どもたちの感想文を読んで何も感じなかったのだろうか。意図したことが子どもたちに伝わっていないことには気付かなかったのだろうか。またこの感想文を恵楓園に送ることによって、それを読んだ入所者がどう感じるかということに、思いは至らなかったのかと疑問を感じる。ただ「差別はいけない」と書いた子どももいたというのがせめてもの救いだろう。

また、このことが契機となり、福岡県は教育現場でのハンセン病問題の指導書を作成する動きが出てきている。

2014.6.6 西日本新聞
「ハンセン病 体溶ける」
人権授業 児童に誤解
恵楓園に感想文
県教委が謝罪
福岡の小学校
「半端な教育」
入所者嘆く
「友達がかかったらはなれます」

▲西日本新聞の記事
（2014年6月6日）

短い時間にハンセン病問題のすべてを人に伝えることはできないが、せめて「入所者は、ハンセン病はとっくに治っている」「ハンセン病は怖い病気ではないし、治療法も確立している」「国のハンセン病政策が間違っていた」「間違っていた国の強制隔離政策に大谷派は全面協力してきた」など、これまでの偏見を破っていくことだけはきっちりと伝えなければと思う。

5月に亡くなった前全療協会長 神美知宏さんの「いつまで我慢すればいいんだ」という言葉が浮かんできた。「ハンセン病に対する偏見差別は次の世代まで持ち越したくない、私が生きている間に解消してくれ」と訴えられたこともある。

伝えられた言葉と真摯に対峙し、ふるさと問題を含めて「元患者お一人おひとりの名誉回復」を考えていきたい。

無知・無関心の打破が、偏見・差別の解消につながると思う。

解放運動推進本部　大屋 徳夫

ネットワークニュース「願いから動きへ」は真宗大谷派のハンセン病問題への取り組みをご紹介する広報誌です。

編集責任　真宗大谷派ハンセン病問題に関する懇談会

第一連絡会報告

寄り添って生きたい…

「ハンセン懇」第一連絡会委員　水澤 孝秀

去る3月5、6日、第一連絡会を開催しました。今回は東日本大震災で被災された方の「生の声」を聴くこと、東北新生園（宮城県登米市）の将来構想を伺いながら現地研修会を行うことをテーマに集いました。

1日目、仙台教務所で、原発事故の被害にあわれた遠藤文美代さんのお話を聞きました。今も続く苦悩。避難して故郷を離れるか、留まるかの選択を強いられています。「福島」を差別的に扱われたことは深い傷となり心に刺さりました。「なぜ、私たちはこんな目に遭うのか」とのやり場のない怒り。放射能という目に見えない恐怖の中、「子どもをどう守っていくかが最重要課題。佐々木道範住職と出会い、内部被曝を防ごうとする活動に参加し、全国の仲間に励まされ、勇気づけられた」と語る姿は、出会いの中で共に生きる道を探っているように感じました。「差別や偏見もある中でなお語り続けることが、子どもを守ることであると思う」という言葉に、私たちはいかに寄り添うことができるのか、共に生きる道を探していくことが大切だと思いました。

2日目、東北新生園で久保瑛二自治会長のお話を聞きました。「園に来て半世紀以上、故郷を離れ、帰ることも許されず過ごしてきた。今は多くの方がこの施設を訪れ、大変うれしい。将来構想に向けて大規模な施設の新築も終わり、生活環境も大きく変わった。自治会の活動が実を結びつつある。終の棲家として、ここに生きてきた証を残したい。いわれなき差別を繰り返してはいけないという思いもある」と語る久保会長の強い思いが印象的でした。

震災とハンセン病問題、事象は違えども原因は国の政策の過誤であり、同時に自らが加害者である事実をあらためて突きつけられました。当事者だけが苦しみを抱え、消えない深い傷を負う構造は、社会が「寄り添う」ことを忘れていることが原因のように思います。人間への回復。それは当事者を指して言う言葉でなく、この社会を生きている私自身への警鐘であり、回復すべきは、この身ではないでしょうか。

2006年に開館したしんせい資料館

第二連絡会報告

歴史をつないでいくために

解放運動推進本部 本部委員　山内 小夜子

去る4月16、17日、栗生楽泉園（群馬県草津町）を訪問しました。

園内のフィールドワークは、園の職員が専門のガイドとして同行してくださり、詳しくお話を聞くことができました。まず納骨堂にて読経、お参りした後、4月30日の開館にむけて建設中の重監房資料館と、元の重監房跡地を見学しました。

1938年設置の「重監房」は戦後の1947年まで運用されました。ここは事実上の監獄であり、正式な裁判もないまま収監された患者たちは苛烈な懲罰に苦しみ、そのいのちを失いました。この9年間に93名の患者が収監され、14名が監禁中に死亡、8人が衰弱して外に出た後死亡されたそうです。医療従事者がどうして患者を罰する権限を持っていたのか、患者は裁判を受ける権利もなかったのか。病を治療し療養する場所で、死に至るほどの監禁がなぜ行われたのか。ハンセン病政策全体を見つめ直す場所として、谷雄二さんをはじめ多くの入所者が重監房の歴史を残したいという願いが、資料館という形になりました。重監房跡地の発掘の状況や新たに発見された遺品の話をお聞きし、次回は是非とも建設かなった資料館に参観したいと思いました。フィールドワークの後に、藤田三四郎自治会長のお話をお聞きしました。療養所の職員定数を確保するための厚労省との交渉が続いています。訪問前日も藤田さんは東京で会議をされていたということでした。

翌日は、崇信教会の中村文雄会長や会員の方々と、お勤めの後懇談の時間を持ちました。

まだまだお聞きしなければならないことがたくさんあるのに、お身体の調子や時間の限定があり、充分な話し合いができなかった様に思います。歴史をつなぐことの大切さと同時に困難さを感じた一日でした。

重監房資料館ホームページが開設されています。http://sjpm.hansen-dis.jp/

重監房資料館　建設の様子

第三連絡会報告

高山別院で解放共学研修会が開かれました

高山教区　江馬 雅臣

6月5日、6日、高山別院照蓮寺御坊会館において、高山教区解放推進協議会主催で2013年度「解放共学研修会」があり、東海連区児童教化連盟一泊研修会、ハンセン病問題に関する懇談会第三連絡会が共催となり約120名の参加で開催された。

第1部講師の小鹿美佐雄氏（国立駿河療養所・入所者駿河会自治会会長）は、テーマ「ハンセン病問題は終わっていません―今、伝えてほしいこと―」と題し、「現在平均年齢84歳の入所者は減少する一方、療養所の医師や看護師などの職員が削減されている。そこには医療機能の低下や、将来的に地域社会から孤立し、再び入所者を隔離してしまうおそれがある。ハンセン病問題は終わっていません。皆さん療養所に来てください」と語られた。

第2部講師の酒井義一氏（東京教区存明寺住職）は、テーマ「大谷派の関わりと真宗門徒としてハンセン病問題に出会うということ」と題し、「ハンセン病問題と、青少幼年教化の底に流れている課題は同じです。そこには、ひとりの人を見失うことのない出会いが求められている。そしてひとりの人を同朋として見いだしていくことが深い願い、問いとしてある」と語られた。

20～40代の東海連区大谷派僧侶による全体座談会では「待った無しの現実を聞き、ともに療養所へ身を運ぶ動きにつなげていこう」と真剣な語り合いになった。

研修会に参加した皆さんと

第四連絡会報告

人生の時間をより豊かにエンド・オブ・ライフ・ケア

解放運動推進本部　本部要員　蓑輪 秀一

5月19～20日、第四連絡会は邑久光明園（岡山県瀬戸内市）での山陽教区の定期交流会に参加した。また園のソーシャルワーカー坂手悦子さんを講師にお迎えし、現在の園内の状況や職員の活動を伺いながら、意見交換を行った。

光明園では現在、エンド・オブ・ライフ・ケア・チームをつくっている。園内のソーシャルワーカーをはじめ医師、看護師、介助・介護師等々、多職種の方々がチームを構成し、情報を共有し全体で活動しようというものだ。平均年齢84才となった光明園の入所者の生活上の様々な問題に対応し解決することに加え、「人生の時間をより豊かに、その人らしく過ごしてもらう」という視点を重視して活動されている。

国賠訴訟後もご遺骨のひきとりは35％という。入所者が亡くなられた後の家族との関係も多くの課題がある。また高齢化に伴い、入所者の互助が難しくなり、認知症が40％程度になっている現状の中で、問題を解決するということではなく、きめ細かな情

報を共有して、入所者にとって一番いい方法を考えていこうという活動状況を伺った。

また、園職員の目線からだけではなく、園の外の人たちとの交流や学習の場を持っていきたいということだった。沖縄愛楽園にもライフサポートチームという同様な活動があり、全国の療養所にも広がっていくだろう。今後、大谷派のハンセン懇各連絡会も、園内のチームとの連携が大切な活動内容となっていくであろう。

光明園恩賜会館での協議の様子

第五連絡会報告

伝えていこう、若い世代へ

「ハンセン懇」第五連絡会委員　福田　恵信

6月11日から12日に第五連絡会が開催され、佐賀県神埼市の西九州大学・社会福祉学部の死生学公開講座に参加しました。テーマは「ハンセン病問題を考える」。

本願寺派円光寺住職の五十嵐雄道先生よりハンセン病の歴史についてお話があり、愛媛県立今治西高校生徒による、大島青松園の様子や入所者との交流を記録した「ハンセン病問題を知っていますか」を視聴。続いて、ハンセン病問題を考えるネットワーク・佐賀の中村久子さんと解放運動推進本部の大屋徳夫さんが聞き手となり、菊池恵楓園入所者の飯田尚子さんにお話を聞きました。

飯田さんは、今年92歳で療養所生活は63年になり、25歳の時に結婚。長男を出産後、ハンセン病を発症。家庭の事情で、実家で療養。長男を出産後、2人の子に恵まれたが、周囲の冷たい視線に死ぬことも考えた飯田さん。30歳の時に夫に連れられて、療養所に入所。入所前に兄から言われた「死んでくれ」という言葉。入所して女学校時代の担任に宛てた手紙。しかし返事はこなかった。インタビューの最後に、「無関心とは認めていることと同じです」と訴えられました。

今回、学生さんの姿に接し、今後も若い世代と一緒にハンセン病問題を考えていく必要性を感じました。

第六連絡会報告

フクシマ、オキナワ、ハンセン病

「ハンセン懇」第六連絡会委員　長谷　暢

4月25～26日に第六連絡会を開催した。初日は退所者の方のお話を聞き、交流を深めた。

沖縄には全国で最も多くの退所者の方が生活されているが、退所者の会に所属している方は一部でしかない。今回はいくつかある退所者のグループの一つに属するお二人に退所者の現状についてお話しいただいた。印象に残ったのは、「裁判（ハンセン病違憲国家賠償請求訴訟）で勝訴した後も、自分たちの生活は何ら変わらない」ということを話されたことである。社会の中で「ハンセン病であったこと」をひた隠しにしながら生きていかなければならない現状が、今も続いているとあらためて感じた。

2日目は沖縄愛楽園（沖縄県名護市）を訪問し、2014年度の冬に愛楽園を受け入れ先とする福島の子どもたちの保養の打ち合わせを行った。金城雅春自治会長から全面的な協力の言葉をいただき、今後の計画に弾みがつく内容となった。沖縄での開催においては国策に翻弄され続けている「フクシマ、オキナワ、ハンセン病」を主題とし、国内で唯一の亜熱帯の地で、寒い冬の時期に暖かい沖縄で楽しんでもらえるような企画をつくりたい。ただ大谷派は1寺院しかなく、資金をどのように集めるか先行きが不安な部分もある。全国のみなさんの支援をいただきながら運営していきたいので、ご協力の程お願いします。

台湾報告

台湾楽生院に行ってきました

去る6月23日、4年振りに台湾楽生院を訪ねました。回復者の方3名と大谷派のメンバーを中心に12名のツアーです。

長らく反対運動が続いていたにも関わらず、楽生院のすぐ近くには新しい地下鉄の駅ができ、園内では地下鉄の操車場・車庫の建設工事が続いています。初めての訪問の折に感じた、ゆったりした雰囲気はなくなっていました。

昭和の色濃い、古いけれど皆さんが長年暮らしておられた家は、住む人もなくすっかりさびれ、皆が集っていたガジュマルの木陰の椅子にも、今は人の姿がありません。これまでも私たちがお話を伺い、一緒に食卓を囲んだ自救会（自治会）の建物には、倒壊防止の鉄杭が打たれていました。

今回もそこで、懐かしい人たちと再会を喜び、昨年の交流集会に参加して下さったお礼を言い、美味しい料理の数々に、皆が唯一覚えていた「ローソンホーチャ」（全部美味しい）を連発。そしてボランティアの大学生から楽生院の現状をお聞きしました。

それによりますと、地下鉄車輌基地建設工事を無理に進めた結果、深く掘削した地面からは地下水が吹き出し、両側の斜面は崩れてきているということ。このままでは建物がずるずると崩れてしまうのではという懸念。その対策として当局が打ち出した「土錨（どびょう）」（斜面に打ち込む杭のこと）への不安。また、新病棟と、新病棟と旧楽生院区をつなぐ橋などにも亀裂が入っている様子を、写真資料と共に説明してくださいました。

自救会元会長の李添培（りてんばい）さんは、「政府は何でも約束するが、守らない。日本はどうですか？」と私たちに質問。メンバーが「日本の政府は約束をしません。『検討します』だけ」と返答しました。こんな危険な状況の中、工事を進める台湾政府と、これほど被害が出ているのに原発をあきらめない日本政府が重なってみえました。

初めて楽生院を訪問したのが2005年。9年の歳月は、否応なく皆の上に変化をもたらしました。金門高粱酒（コーリャン）がお好きだった寡黙な呂（ろ）副会長、カラオケで一緒に日本の懐メロを歌った黄（こう）さんは亡くなっていました。京都の交流集会に参加してくださった日本語の堪能な鄭天正（ていてせい）さんは両足を膝から切断され、人工透析の日々です。しかし思ったよりお元気な様子にホッとし、名前を覚えて下さっていて感激。そして、皆さんと再会を約束して、楽生院での2日間は終了しました。

京都教区　本多 倫子

楽生院新病棟と地下鉄工事の様子

楽生院保留自救会の皆さんと

世のいのりにこころいれて

世に満ちている「人間でありたい」「本当に生きたい」という人々のいのりを、ちゃんと聞きながら…

三園合同花見に参加して

「三線（さんしん）ブラザーズ」による演奏の様子

去る４月９日（水）、長島愛生園（岡山県瀬戸内市）の真宗会館において瀬戸内三園の合同花見が開催されました。久しぶりに参加させていただいて楽しいひと時を過ごすことができました。お花見ということで、隔月の同朋会には参加されていない方々とも出会えました。今回はあまり席を移動せずにゆっくりすることにしました。出来るだけ多くの人と言葉を交わすというのもいいのですが、限られた時間はあっという間に過ぎ去ってしまいます。やはり人との語り合いが一番お花見を楽しめると思いました。今日は誰かとゆっくり話したいなと思ったのです。

話すということは聞くことがあってはじめて成り立つのだと思います。聞けば問いが生まれます。そんな問いを交わしあうことでますます会話は豊かになっていくのでしょう。実際にどれほど語り合えたかは分かりません。が、会議や座談会ではありませんので、それはあまり気にしなくてもいいでしょう。

何人集まったのか、100人くらいはいたのでしょうか。あるいはもっとでしょうか。持ち寄りの料理とお酒。音楽やマジック。お花見は続きます。

人は誰でも損なわれたくないし、なにものからも損なわれてはなりません。しかし、自分が他人を損なっていることには無自覚な場合が多々あります。もっと聞き続けていきたいです。語り続けていきたいです。

最後は納骨堂にお参りし解散しました。ありがとうございました。

山陽教区　**赤松 豊永**

【連載】

私たちにできること

ハンセン病回復者支援センターの取り組み⑥　最終回

ハンセン病問題解決に向けて

今こそ、私たちが引き継いでいくことが大事

２０１４（平成26）年５月９日、「第10回ハンセン病市民学会総会・交流集会ｉｎ群馬・草津」の前日、全国ハンセン病療養所入所者協議会会長の神美知宏（こうみ）さんが草津で急逝、５月11日にはハンセン病違憲国賠訴訟全国原告団協議会会長の谷雄二（こだま）さんが闘病の末亡くなられました。当事者運動を牽引してきたお二人を失った悲しみははかりしれません。

ハンセン病療養所の入所者の高齢化は進み、今年２０１４年５月１日現在、全国の国立ハンセン病療養所入所者は１，８４０名で、平均年齢は83・６歳です。療養所は２００６（平成18）年以降、国のすすめる合理化政策によって、職員定数が減らされています。その上職員を募集しても集まらないため欠員まで出て、人手不足が深刻です。医療・看護・介護の質が低下し、生存権が脅かされている状況を、いつも神会長は訴えておられました。ハンストや座り込みを主とした実力行使決議に全療協は踏み切り、緊急の際に市民の理解と支援を訴えるため、亡くなる前日も全療協緊急アピールの原稿を書きました。５月10日のハンセン病市民学会総会・交流集会で訴える予定だったのです。そのアピール文には「全療協は刀折れ矢尽きるまでたたかい抜く」と書かれていました。いつも神会長は、「入所者はもう高齢だ、ハンセン病市民学会の皆さんが頼りだ」とおっしゃっていました。

谷雄二さんは、「ハンセン病市民学会総会・交流集会ｉｎ群馬・草津」の最終日であり、13年前（２００１年）の「らい予防法」違憲国賠訴訟熊本地裁勝訴判決の日である５月11日未明に亡くなられました。谷雄二さんは、いつも理路整然と話をする人で、「いのちの証し」とは何かをハンセン病を患い究極の人権侵害を受けた当事者の立場から訴えられていました。私たちの心を打つ発言でした。

お二人を失った私たちはどうすればいいのか、悲しみに沈んでばかりはいられません。「ハンセン病運動に大きな試練」「涙を拭いて起ち上ろう」と、６月１日発行の「全療協ニュース 第９７号」は呼びかけています。「二人がリードしてきた方向をしっかり確認し、みんなでその遺志を継いでいくこと」が大切だと訴えているのです。

ハンセン病回復者に残された時間は少ない

毎年、開催されている厚生労働省との「ハンセン病問題対策協議会」は、今年は６月20日に開催されました。皆さんからは「時間がない」「今やることが大切だ」という言葉が多く語られました。「人生の最晩年を生きる人々の医療・看護・介護の問題、ハンセン病問題を風化させないよう、歴史を語り継ぐためにも歴史的建造物の永久保存と資料館に学芸員の配置を」と当事者は訴えておられました。

私たち市民は何ができるのでしょうか。ハンセン病患者を地域から追い出し、療養所へ追いやった「無らい県運動」、二度と同じ過ちを犯さない取り組みが、各地で創意工夫をこらして行われることが求められています。共に頑張りましょう。

社会福祉法人恩賜財団済生会支部大阪府済生会・ハンセン病回復者支援センター
コーディネーター　加藤 めぐみ

＊33号から今号まで全６回にわたり連載していただきました。加藤めぐみさん、ありがとうございました。（編）